

もう一つの宗教改革 —メンデルスゾーンからメシアン、そして古典芸能の可能性—

上 村 敏 文*

「一日は千年のようで、千年は一日のようです」(Ⅱペテロ3:8)

メンデルスゾーンの「宗教改革」

2017年は、いわゆるルターの宗教改革500年ということで、カトリックとルーテル教会の長崎における合同礼拝など歴史に残る「イベント」がいくつかなされた。その様々なチャレンジングな試みの中で、日本ルーテル教団関東地区・日本福音ルーテル教会合同礼拝(国際基督教大学礼拝堂)においてメンデルスゾーンの交響曲第5番「宗教改革」が演奏されたことは格別の「出来事」であったということができよう。数年前からこの交響曲の存在を知るにつけ生演奏で聴いてみたいと熱望していたが、なかなかその機会を得ることができなかった。プロのオーケストラに所属する何人かに問い合わせしてみたところ、一つには集客が難しいこと、そして何よりも技術的にも難しいので「やりたくない」とのことであった。

メンデルスゾーンの時代においてすら、同時代のフランスでは、おそらくは演奏スタイル、音楽に

対する価値観の相違もあり、またフーガを中心とした「ドイツ音楽」は受けられなかったようである。その後作曲が完成してから紆余曲折の2年後にメンデルスゾーン自身の指揮による初演は果たされたものの、批評家の冷たい評論に接し、若き有望なる作曲家はすっかりと自信を失ってしまい、以後この交響曲「宗教改革」はほとんど演奏されることがなくなってしまったようである。日本においてはなおさらのことであろう。

このような状況の中で、可能なことは出来る限り環境の整った名曲喫茶に向いてその演奏に触れることでしかなかった。初めて聴いたのは台風直撃、2017年葉月初めの京都であった。雨脚が次第に強くなり暴風が迫り来る中、「物好き」は私以外にはシヨパンを楽しむ一人の孤老だけであった。ご自分の曲を聴いた後、この老紳士は静かに席を立ち、名曲喫茶の広い空間は、私一人が独占する何とも恵まれた機会となった。このほとんど演奏されない交響曲がいかなる音楽であるのか期待に胸が膨らんだ。

* Uemura, Toshifumi
ルーテル学院大学

改革とは決して「静」であるはずはなく、内的にも外的にも極めて「動」の世界であるはずである。交響曲「宗教改革」は窓を叩きつける嵐と激しい雨音と共に、レコードの針が静かに降ろされた。4楽章から構成されるが想像していた「大曲」ではなく、約30分と交響曲としてはむしろ物足らなさを感じないではなかったが、フルトベングラーが最晩年に演奏したカーネギーホールでの会場録音は、雑音は多いものの圧倒的な迫力を持って異国の者の魂を鷲掴みにするには充分であった。

若きメンデルスゾーンの「宗教改革」の初演については、加藤拓未氏（日本福音ルーテル大森教会会員）が、2017年11月4日、国際基督教大学礼拝堂で行われた日本ルーテル教団関東地区・日本福音ルーテル教会合同礼拝の曲目解説にも触れてあるが、前述したようにすでに1830年5月には完成していたものの、記念式典はおろか、メンデルスゾーンが個人的に打診したフランスの交響楽団においても演奏家からの評判も芳しくなく、ようやく自身の指揮によるベルリンの慈善演奏会で初演が行われた。その後、演奏がほとんどなされなかったのは、その出自がユダヤ人であったが故、あるいは、当時のカトリック教会からの横槍が入ったということも言われているが、いずれにせよ、「宗教改革」を今日のように、カトリックとの合同礼拝に続き、二つのルーテルの合同記念行事として行うという状況には程遠かったことだけは間違いのないところであろう。

私がこの小論で特筆したいことはただ一つ。19世紀当時も、そして現代の主要なオーケストラも取り上げようとしなかったメンデルスゾーンの「宗教改革」をあえて「神の摂理」とだけ記すが、まさに奇跡的に予算が計上され、室内楽編成（松岡あさひ氏編曲）ではあったが、記念すべき日に間に合うように、しっかりと演奏がなされたという事実である。

前述の加藤氏へのヒアリングによると、地方では名古屋フィル、九州交響楽団、そして九州ルーテル学院大学で行われた「宗教改革500年記念合

同礼拝、記念講演会&演奏会」で、ラスカーラ・オペラ協会が演奏しているとのこと。その他、アマチュアの団体が、以下の通り演奏をしたとのことである。

- (1) 4月8日 神奈川県立音楽堂
石川星太郎指揮
オーケストラ・シンフォニカ・フォレスト
第6回演奏会
- (2) 5月5日 大田区民ホール 小森康弘指揮
横浜市立大学管弦楽団 Spring Concert
2017
- (3) 6月25日 新宿文化センター
小松拓人指揮
新宿交響楽団 第53回定期演奏会
- (4) 7月17日 アクロス福岡 延原武春指揮
フィルハーモニア福岡 第33回定期演奏会
- (5) 9月30日 伊丹アイフォニックホール
藤田謹也指揮
かぶとやま交響楽団 第55回定期演奏会
- (6) 10月7日 大田区民プラザ 須藤裕也指揮
マグノリアオーケストラ 第14回定期演奏会

一方、海外においては、予想に違わず掲載することも躊躇するほど多数の演奏会が行われたことがインターネットの検索でも了解できる。またブライトコプフ&ヘルテル社の「新メンデルスゾーン全集」が出版されたそうで、今後日本でも演奏される機会が増えてくることは考えられるであろうし、新日本フィルが、鈴木雅明の客演指揮（バッハ・コレギウム・ジャパン音楽監督）他、アマチュアの団体も取り上げるようだ。

宗教改革の年に当たって、メンデルスゾーンの気持ちを斟酌するに、やはり作曲をしたもののそれが取り上げられないという体験は耐え難いことであったのではないだろうか。加藤氏によると、作曲は「委嘱」でもなく「自発的創作」としてお

られる。その根拠として声楽作品ではないことを挙げられている。確かにバッハのマタイ受難曲にしても、ヘンデルのメサイアにしても、声楽の部分が重要な構成要素を占めているのに対して、メンデルスゾーンのそれは、器楽演奏であるということ、当時の慣例から外れているとの見解で、確かに当たっているであろう。その点、なぜメンデルスゾーンが、当時の様式を採用しなかったのかという謎は残るし、また声楽曲が入っていたなら演奏機会が増えていたかもしれない。たとえ「ハレルヤ」の意味がわからなくとも、声高らかに歌い、ドイツ語を十分に理解しなくてもマタイ受難曲を歌おうとする日本人はまことに不思議ではあるが、サムシンググレート、何か見えざる偉大なる「存在」を感受していることは間違いないのではなからうか。

メンデルスゾーン自身もルーテル教会の信徒として、「アウグスブルク信仰告白」成立の1530年6月25日から300年の1830年に照準を合わせ、バッハの再発見者としてだけでなく、自分自身も音楽の表舞台に名乗りをあげる機会であると秘められた大志を持っていたかもしれない。否、明確に認識をしていたと推測はできる。しかし、その後の演奏記録について、今回のメンデルスゾーンの「宗教改革」を取り上げてくださった加藤拓未氏に質問をして詳細にご回答をいただいたが、端的に言うならば、自信を失ってしまったということに尽きるであろう。評価されるどころか、信頼していた評論家から受けた不評は、若きメンデルスゾーンをして落胆させるには十分であったであろう。以下、加藤拓未氏からの回答を長くなるが、そのまま転記させていただく。

「1837年12月にドイツのデュッセルドルフで、本人の意思とは関係なく《宗教改革》が演奏されました。これは好評だったようですが、その報を受けてもメンデルスゾーンの気持ちは変わらず『もう《宗教改革》の存在には耐えられない、燃やしてしまいたい』と返信の手紙に書いています。こ

のようにメンデルスゾーンは、《宗教改革》を作曲したことさえ、激しく後悔する状態に陥り、その後《宗教改革》を演奏したいという依頼があっても、拒否しました。その様子を知っていた息子や、親戚、そして周囲の友人たちは、その記憶から、メンデルスゾーンの死後も《宗教改革》の出版を躊躇しました。そのために出版は遅れ、ようやく日の目を見たのは、1868年の春です。メンデルスゾーンが1847年に死去してから約20年後のことです。出版が確定した頃、イギリスの出版社が所有していた《宗教改革》のコピー楽譜のコピーが出回り、それをもとに1867年の暮れから1868年初頭にかけて、ロンドンやリヴァプールで《宗教改革》が演奏された記録があります（メンデルスゾーンはイギリスでは、非常に人気がありました）。フランスでも1868年3月に《宗教改革》の演奏が行われ、再評価の機運があったようです。しかし、ドイツでは出版後もあまり再評価が進まずに、しばらくは交響曲《スコットランド》や交響曲《イタリア》の陰に隠れた存在だったと言えます。」

彼の「悔しい気持ち」を、天国のメンデルスゾーン本人も全く思いもしなかったであろう「異教」の国である日本において、ルーテルの合同礼拝で小編成といえども演奏されたというこの快挙に間違いなく喜んでいるのではないだろうか。

第一楽章の「ドレスデン・アーメン」に始まり、第四楽章のルター作曲のコラール「わが神はやぐら」(教会賛美歌450番)のモチーフ、そしてバッハのカンタータ第80番(BWV80)が広がっていくさまは、まさにバッハの「再発見者」として、また加藤の言うところの「メンデルスゾーンの明瞭な信仰告白」(プログラムp46より)であるといえるのではないだろうか。奇跡的なそして迫真の演奏を、衷心よりこの書面を通して感謝したい。

オリヴィエ・メシアン作曲「アッシジの聖フランチェスコ」

もう一つの「宗教改革」として、直接的に関係があるわけではないが、舞台をカトリック教会のフランス、イタリア、そして日本にその点景を移す。20世紀最大の作曲家であり鳥類学者、神学者として知られているメシアン（1908～1992）の難解な作曲は、現代音楽のジャンルの中においても特異な光彩を放っている。2017年、サントリールホールでの全面的オーバーホール後、メシアンの「アッシジの聖フランチェスコ」が選ばれたことは、まさに驚愕すべき出来事であった。

すでに小澤征爾により、1986年3月12日に東京カテドラル聖マリア大聖堂で、部分的（第3景「重い皮膚病への接吻」、第7景「鳥たちへの説教」、第8景「死と再生」）が初演されたが、それでも2時間にわたる演奏となったようだ。これに先立つ1983年11月28日に、同じく小澤による指揮で、パリ・オペラ座において世界初演がなされたそうであるが、欧州の音楽界のトップニュースを飾ったという。そして今回は日本においての全曲演奏が満を持して行われた。40分の休憩を2回入れての3部構成の大作は鳴り止まぬカーテンコールを含めると6時間を超えるものであった。メシアンの最晩年の作品として、苦難の連続で完成することができたことは、やはり「大きな力」が活いた^{はたら}としか思えない。この大作は、しばしばワーグナーの「パルシファル」にも比定される。同時に、鳥の声を特別な存在として捉えていたメシアンは、鳥と対話ができたとするフランチェスコの再来とでもいうことも、ある意味においていうことができる。

宗教曲にして現代曲、現代曲にしていわゆる他の現代曲とは全く異質であるのは、様々な鳥の鳴き声がスコアに反映されているのである。そうはいっても、このメシアンの難解な大曲に日本のオーケストラがどのように取り組み、そしてそれを聞く日本の聴衆たちが、長時間「忍耐」しうるかは、まさにチャレンジであったはずである。演奏家の立場からするとたまったものではないであろう。ただ聞くだけでも「重労働」であると感じるのであるから、それを演奏するとなったらどれ

ほどの荷重ワークがあることであろうか。

またその中心的な主題がキリストを中核に置く作品であることが、宗教改革500年と関連があるか否かは別として、日本を代表するコンサートホールでの記念コンサートの演目として選択されたことは注目して良い。

クリスチャン人口が1パーセント未満といわれる日本社会ではあるが、その一方で、一般の公立大学の講座などで、日本のクリスチャンのパーセントを質問するなら、大半が20パーセント前後という答えが多数を占め、時には50パーセントを超えていると回答するケースもあることがこの数年でわかったことである。1パーセントとするのはミッション系の高校を卒業した少数の学生であった。きちんとしたアンケートを体系的にしたわけではないが、いろいろな講演会でやはり一般の方々に尋ねると、10パーセントを下回ることは逆に少ない。これは日比谷花壇の葬儀におけるキリスト教葬儀の割合とほぼ一致している。教会に毎週通っている人口は少ないかもしれないが、明治の開国以降、医療、福祉、教育などの働きにより、確実にその影響力が大きくなってきたことは間違いない。そして、特に音楽の世界においてはすでに確固たる「地位」を得ていることは議論の余地はないようだ。そして、葬儀だけではなく特に音楽のジャンルにおいては、キリスト教「文化」の与えた社会的影響は想像を超えるものがある。

今回のメシアンの「アッシジの聖フランチェスコ」全曲演奏の試みも2017年という特別な年においてやはり特別なプログラムとなった。第1部においては多くの観客もまだメシアンの世界に浸ることができなかったものの、第2部になると徐々に引き込まれ第3部になると完全にその複雑で難解と思われたリズム構造の世界の虜になっていた。この文章を書いている今も強烈にマリンバのしつこいまでに繰り返されたリズムが筆者の魂に焼き付いて離れることはない。メシアンの楽譜を見ると、「これは何だ」というくらい変則的

な音符が並んでいる。これは、先ほども記したが、単なる現代曲ということではなく、鳥類学者でもあるメシアンが、様々な鳥の鳴き声をフランスだけでなく、様々な地域において採譜したのである。日本の例えば富士山などでも採譜したことは有名であり、また京都や伊勢を訪問し、日本の伝統芸能、特に能楽に共感したことも、日本における宗教風土、芸術、そして宗教を考察する上で注目すべきであろう。能楽にとどまらず雅楽の影響も受けていることは明らかである。例えば「天の声」ともいわれる笙を五線譜に仮に表すとすれば、それはかなり複雑なものとなるであろう。「日本的な」ものを仮に文章や、音符に写し取ることはおそらくは不可能なことである。メシアン自身、教会オルガニストとしてのアイデンティティー以上に「神学者」として、あるいは鳥類学者として、以下のように論じている。

「科学的な研究や数学的な証明、数多の生物学的実験が、一度でも我々を不確実性から救った試しはありません。まったく逆にそうしたものは、現実と信じられていたものの中に新たな現実を見せ続けることで、私たちの無知を拡大してきました」(アルムート・レスラー (吉田幸弘訳)『メシアン創造のクレド 信仰・希望・愛』春秋社、「プログラムへの序」より)。

メシアンと能楽

現代音楽の嚆矢とも目されるジョン・ケージすら、メシアンのリズム構造に対して、拍の湾曲(Tempokurven)の欠如を指摘する。ましてや古典派やロマン派などの音楽に親しんできた耳においては、あたかも支離滅裂としか思えないかもしれない。しかし、一方で能楽のリズム構造は極めて近似するところがあるように思う。例えば能楽堂で聞いている鼓のリズム構造は、一見シンプルに思えるが、実は非常に複雑で何百というバリエーションがあり、これを習得するには想像を絶する修練が必要となってくる。世阿弥が「芸術」の領域として大成してから600年を超える時間軸

の中で継承されてきた日本を代表する総合演劇であり、親から子へと妥協されることなく、何十年と舞台の上に立つ能楽師にしてようやくそのエッセンスを体得することができるのであろう。知れば知るほど、その奥深さに驚愕せざるをえない。

天才的な能力を与えられたメシアンはこの日本の伝統芸能に接することにより、何がしらの共通項を見出したことであろう。総合芸術としての能楽は、幸いにして幾多の時代の嵐の中にもその命脈を保ち、今日にまで見事にその大輪を咲かせ、日本国内にとどまらず今や欧米などでも上演されるようになっていく。その理論研究にしても、法政大学能楽研究所主催の国際能楽研究の発表を聞いても、今や欧米の学者が日本人以上に深く能楽を研究していることに驚かされる。メシアンにしても、おそらく能楽の影響は陰に陽に受けていることは間違いのないことであることは先にも少し触れた。

いわゆるアッチェランドやリタルランドとは異なる次元の「間」の課題であることに洞察がゆくのであればメシアンの「現代音楽」は、一気に古典に回帰するのである。逆のことが能楽にも当てはまり、現存し続けているという意味で最古の能楽が、極めて現代的であるということもまた真となる。戦後から高度成長期にかけて低迷期があったにせよ、今や能楽堂は若い観客も含め、老若男女の善男善女が集う「サロン」になりつつある。大名や武家の式楽が、明治の富裕層からその主体が一般の人々に移ってきている。そこには、背後にある厳格な音楽理論が存在するのであるが、無意識のレベルで共感するものが、現代人にも響いてくるのであろう。観阿弥、世阿弥という天才父子により世界に誇る芸能があることは変えがたい財産である。

このような伝統の蓄積があるからこそ、メシアンの「難解」といわれる音楽が日本人のクラシックファンにも受容されたのではないだろうか。メシアンの弟子であり、「鳥のカタログ」シリーズを日本に紹介された船岡陽子氏は、日本の伝統芸能をメシアンに紹介されただけでなく、神道を

基層とする日本の宗教性をも触れるきっかけを与えた。西洋音楽の古典派からロマン派を経て現代曲へ変化していく過程でまさに温故知新、能楽の逆説的ではあるが「現代性」は、ユネスコの無形遺産の第一号に選ばれたことから了解されるように、古典芸能にあって同時に現代にも通底する「新しさ」をも有しているのである。メシアン「アッシジの聖フランチェスコ」も、約1000年前の出来事を扱いながらも、極めて現代的な要素をも内包し、違和感なく現代に生きる我々に自分たち自身の問題意識として迫ってくる。それが故に、「難解」な大曲であるにもかかわらず、鳴り止まぬ拍手の渦が続いたのであろう。

冒頭に挙げた聖句第二ペテロ3章8節は、宗教改革500年というスパンが、地球に寄宿する人類からすると確かに長い年月のように思えるが、「神の領域」からすると半日にしかならないことを暗喩する。「死と復活によって人は罪赦され、それを信じる信仰しか神に受け入れられない。それが神の恵みであるという宣言」という、柴田千頭男師の日本ルーテル教団関東地区・日本福音ルーテル教会合同礼拝における説教はまさにこのことを示しているのではないだろうか。

2000年近く遡り、信仰の父であるアブラハムに、その根拠をパウロは置き、アブラハムのその想像を絶する神への信頼（信仰）は、神に受け入れられた。その出来事をして人間は誰であれ、その信仰により神に義とされたとした信仰義認の「再確認」は、ルターをして、「人間の危機」、「教会の危機」に警鐘を鳴らした。「救済の歴史は、500年、1500年の単位で動いていて、その大きな神様の時の流れの中に私たちが今あることを忘れてはならない」という柴田師の力強いメッセージは、我々の魂に改めて刻みこまなくてはならないであろう。

昨年著者は、10月27日に大阪城を臨むルーテル大阪ルーテル教会にて、文楽とルネサンスダンスによる「宗教改革」の試みをさせていただいた。まだ完成したとはいえないし、新機能「ルター」

もまだまだ改変の余地がある。インターカルチュラルな世界にあって、500年後にフランスあるいはドイツで、この文楽、あるいは能楽の作品が再演されることを期待してみたい。